

(5) 魚類・円口類

魚類・円口類は日本の淡水には約 200 種が生息し、埼玉県からはこれまでに 26 科 93 種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種や迷入種などを除いた 52 種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約 27%にあたる 14 種をレッドリスト掲載種とした。

これまでの魚類・円口類の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版の 36 種、前版の 34 種、そして本書の 14 種と、掲載種が半数以下に減少した。これは前版までのレッドリスト掲載種について、後述するようにレッドリストへの掲載の妥当性を根本的に見直した結果、それらには容易に採集できる種、生息記録が文献からも確認できなかった種、生息地の記載がない種、生息環境に不明な記述がある種、生息の実態が不明な種などが含まれていると判断した結果によるものである。しかし、魚類・円口類における希少種の生息状況は、水質汚濁、湧水・湿地環境の消失や河川改修、田園地域の生息地の消失等による生息環境の劣悪化が進行しているだけでなく、人による捕獲圧も主な減少原因となっているのが現状である。

本書作成にあたり、これまでに蓄積してきた本県産魚類の採集データ（2005 年以降の県内約 1,000 地点の現地調査データ）と最新の本県産魚類分布データ（金澤, 2014a）、過去の本県産魚類分布の知見（金澤, 1991；金澤ほか, 1997a）の情報を整理して、まず、埼玉県の魚類・円口類全種について過去の正確な状況把握をおこなった。それを踏まえて本書刊行のために実施した調査から得た情報を統合した結果、前版からは大幅な変更となる 14 種からなるレッドリストを作成した。

なお、魚類・円口類の生態的特性を考慮し、本書ではこの分類群に関して従来の地帯区分別レッドランクの評価を廃止し、全県一区でのレッドリストのランクのみの評価をしている。

また、今回のレッドリストを作成するにあたり、国内他地域から導入された個体群または導入された疑いがある個体群は対象から除いた。さらに、主な生息地が河口域や海域の種のなかでも、県内の河川に侵入して定着や産卵等が確認されていない種も評価の対象から削除した。なお、文献や標本、写真等による具体的な生息記録が確認できず、生息情報が聞き取り調査のみによる種についても評価はしない方針とした。

本書の後半には前版のレッドリストから外れた種についての簡単な解説はあるが、本県の魚類・円口類相を総括する意味で、まずレッドリストから外れた種の、次いで記載した種の概要を以下にまとめておく。

前版の掲載種のうち、シラウオ科イシカワシラウオ、コイ科シナイモツゴ、アカヒレタビラ、ボラ科メナダ、ハゼ科エドハゼ、ゴクラクハゼは本県に生息していたことを報告した文献が確認できず、具体的な採集記録も少ないため評価の対象から除外し、さらに埼玉県の在来種という扱いからも削除することが妥当と判断した（金澤, 2014a）。また、シラウオ科シラウオとハゼ科ピリングは、1990 年以降の記録が少なく、主な生息地は河口域であり、一時的に河川に出現するに過ぎないと考えられることから、レッドリストから外した。

ヤツメウナギ科カワヤツメは利根川上流（河口から 153km 地点）の採集記録はあるが、主な生息域は河川下流域であり、希に遡上することもあるとされるが、生態が明らかではないため、リストから外した。さらに、コイ科マルタ、ドジョウ科シマドジョウ、ギギ科ギバチ、ナマズ科

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

ナマズ、カジカ科カジカ、ハゼ科ウキゴリ、ムサシノジユズカケハゼ、アシシロハゼは、1990年以前から生息状況は安定しており容易に採集されることから、リストから外した。

アカザ科アカザは1980年代に突然採集されるようになり（金澤ほか，1997a）、国内移入された可能性も残るが、現在でも生息地での発生状況は安定していること、サケ科サケやハゼ科スミウキゴリの生息状況も安定していることから、いずれもリストから外した。サヨリ科クルメサヨリ、カワアナゴ科カワアナゴは荒川下流、新河岸川などで採集されるが、生態が明らかではないことや国内移入の疑いがあることからリストから外した。

ドンコ科ドンコは具体的な採集記録がなく、国内移入された可能性も残るなど不明な点があることからリストから外した。

次に、レッドリストに掲載した種について述べておく。

本書で新たにリストに追加された種のうち、ウナギ科ニホンウナギは、県内の生息数が減少していること（金澤，2014）からNT2のランクと評価した。本種は国のレッドデータブック最新版でも絶滅危惧種とされている（環境省，2015）。キュウリウオ科ワカサギは荒川などに東京湾から産卵時期に遡上している河川遡上群で、生息地が局限されていること（金澤，2014a）からNT1とした。

本書の掲載種のうち、コイ科ミヤコタナゴは滑川町福田の3つのため池が最後の生息地であったが、オオクチバスなどの国外移入種の侵入が確認されたことから、3つのため池に生息する本種を地曳網等ですべて採集し、現在ではその系統が人工環境下で継代飼育されている（金澤，1990，1991）。ゼニタナゴは児玉郡美里町のため池が最後の生息地であった（金澤，1990，1991）。タナゴは採集記録が極めて少なく、生息が確認されていた当時の生息状況は不明である。これらタナゴ類3種は最近の調査でも記録はなく、天然水域では絶滅したものと考えられ、特に後2種は飼育保存の可能性もないのが現状である。

トゲウオ科ムサシトミヨのレッドランクはCRのままであるが、自然環境下における生息状況は、特にこの数年の間に不安定となり、生息数は激減している。2002年の生息数調査では33,000尾であったが、2006年には15,000尾と生息数が半減した（金澤，2006）。その後、生息環境の復元を行った結果、2011年の生息数調査では22,000尾（金澤，2011b）にまで生息数が回復した。保全対策により明らかな効果が認められていたが（金澤，2005～2013、2006～2013、2007a，2007b，2010，2011a，木持，2005～2013）、2016年の生息数調査（埼玉県，2017）では5年前の22,000尾に比べて1/10に減少し、約2,000尾になった。2013年12月には特定外来生物コクチバスが天然記念物指定区域で発見（金澤，2014b）され、その後、2014年からは、以前は観察されたことがなかったコイ科魚類の魚群や大型魚の遡上が確認（金澤，2017）されており、それらが本種の生息を脅かす存在になっていることが危惧される。このような状況が続けば、近い将来、本種は野生絶滅する恐れがある。

ヤツメウナギ科スナヤツメについては、これまで具体的な生息地の記載がないことや生息地の水田、谷津田、底質の泥、砂などの生息環境に不明な点が多い。本種はかつて *Lethenteron reisseneri* 一種とされてきたが、遺伝的特徴の異なるスナヤツメ北方種 *Lethenteron* sp. N. とスナヤツメ南方種 *L.* sp. S. の2つの地域集団があり、埼玉県内でも分布域の重複がみられることが判

明したため（中坊，2013）別種の2種として扱った。しかし両種は隠蔽種群であり、形態的な特徴から両種を個体レベルで識別することは困難であるとされているが、北方種は虹彩に黒色素が沈着して黒ずんでおり、南方種は虹彩のグアニンが目立つ傾向にある（愛知県，2015）。また、岐阜県では平野部の湧水河川に北方種が生息し、河川上・中流域に南方種が分布する（向井ほか，2011）とされる。これらの知見と、埼玉県分布が平野部から河川上・中流域であること、虹彩形態の差違から、スナヤツメ北方種とスナヤツメ南方種としてレッドリストに掲載することにした。詳細な生息分布を明らかにするには得られた個体は分子生物学的な手法を用いて種を判別する必要があるため、分布域以外の記述は差し控えた。なお、本種の埼玉県内における生息地と生息環境の一部について新たな知見を得られたが（金澤，2016）、これまでに把握できている生息地の環境は脆弱で、絶滅を危惧すべき厳しい状況にあると判断してレッドランクを前版のENからCRに上げた。

ドジョウ科ホトケドジョウは生息する湧水環境が悪化しており、生息数が減少していることから、ENからCRにランクを上げた。サケ科ニッコウイワナ、ヤマメは度重なる他県産放流魚と在来個体群との交雑で生息域が減少している。特にNT2からVUにランクを上げたニッコウイワナは、源頭放流されたエゾイワナにより上流域で在来個体群との交雑が進行し、在来個体群の遺伝的独立性が危惧される。（金澤，2014a）。

コイ科ヤリタナゴはランクを現状維持のCRとしたが、愛好者による産地不明の本種と産卵哺育貝の放流により在来個体群の系統の維持は困難な状況にあると考えられる（金澤，2014a）。このような状況にある種については、本県産の在来個体群と生息水域の保護のため、遊漁者の理解と協力も欠かせないと考えられる。

コイ科キンブナは以前から生息数が少ない魚であるとされてきたが、今回の調査でさらに生息数が減少していることが顕著になったため、NT2からVUにランクを上げた。

メダカ科ミナミメダカは、地域毎の在来個体群の保護が急務であるとされているが、以前から埼玉県では比較的広範囲に分布していることから、VUからNT2にランクを下げた。県内で未分布だった地域に人為的に移入されている事例もあり、それらの中には採集して継代飼育するとヒメダカが出現した例もある（金澤，2014a）。

以上のように、レッドリスト記載種は減少したが、今なお絶滅リスクが高い種は多い。

本県の魚類・円口類相の近年における大きな変化の特徴として、これまでの調査から、特定外来生物のオオクチバス、コクチバス、ブルーギル、チャネルキャットフィッシュ、カダヤシと国内移入種のカワムツ、ホンモロコなどの自然繁殖や放流、逸出による分布の拡大が顕著に見られ、それらによる捕食、競合、交雑、およびカワウによる捕食などにより在来種への様々な影響が危惧される。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、中村（1969）、中坊 編（2013）を参照した。

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

【目名・科名】 コイ目コイ科

【和名】 **タナゴ**

【学名】 *Acheilognathus melanogaster* Bleeker

埼玉県(2018) EX 環境省(2015) EN

指定状況 -

【形態】 口に1対の短いひげがあり、背鰭軟条間の鰭膜に黒斑がないか、あっても基底付近。体側に1本の縦帯があり、その前端は腹鰭起部より前。背鰭分枝軟条数は10以下でタナゴ類中最も体高が低い。産卵期のオスは青緑色の強い婚姻色を現す。全長7～8cm。

【国内分布】 本州（関東地方と東北地方の太平洋側）

【主な生息環境】 平野部の池沼や用水などに生息し、水草の繁茂した水深の浅い場所を好む。雑食性で附着藻類、底生小動物を捕食する。繁殖期は春から初夏でドブガイなどの鰓葉内に産卵する。

【県内での生息状況】 過去の採集記録は極めて少なく、戸田市の水田用水路（福島，1989）の記録が残る。また、埼玉県動物誌（福島，1978）によると採集時期や場所の特定はないが、旧浦和市、川越市、中川、利根川流域の池沼の記述がある。生存時の生息地の状況は不明であり、現在の環境下では絶滅したものと考える。

【特記事項】 1960年代に旧浦和市（現さいたま市）四谷の用水路で採集されたが、その後の採集記録はない。

【目名・科名】 コイ目コイ科

【和名】 **ゼニタナゴ**

【学名】 *Acheilognathus typus* (Bleeker)

埼玉県(2018) EX 環境省(2015) CR

指定状況 -

【形態】 口にひげがない。タナゴ類中で体高が高く、体の側線は不完全で、胸鰭上方までしか達しない。体側に縦帯がない。体側の縦列鱗数は50以上。産卵期のオスは頭部から体側面が紫紅色に、鰓蓋から体側にかけて鮮紅色、腹鰭の前部分は白色の真珠光沢になるなど淡い婚姻色を現す。満1年で全長6～7cm。

【国内分布】 本州（神奈川県・新潟県以北）

【主な生息環境】 主にため池に生息し、9月～11月にカラスガイやドブガイの鰓葉内に産卵する。二枚貝となる産卵哺育貝の生息環境が必要である。

【県内での生息状況】 1988年に児玉郡美里町のため池で生息が確認されたのを最後に、本県からは絶滅した。このため池の産卵哺育貝はドブガイであった（金澤，1990,1991）。

【特記事項】 関東地方では絶滅している。

【目名・科名】 コイ目コイ科

【和名】 **ミヤコタナゴ**

【学名】 *Tanakia tanago* (Tanaka)

埼玉県(2018) EW 環境省(2015) CR

指定状況 国指定天然記念物・国内希少野生動物種

【形態】 口には1対のひげがあり、背鰭軟条間の鰭膜中程に黒斑がある。体側には有色の縦帯がない。側線は不完全で胸鰭上方にしか達しない。産卵期のオスは体色が紫色、胸鰭、腹鰭、臀鰭に朱色の特徴のある婚姻色を現す。所沢市にかつて現存していた本種のオスはナナイロの方言があった。全長3～4cm。

【国内分布】 本州（千葉県、栃木県、茨城県の一部）

【主な生息環境】 4月～7月頃に用水や河川ではマツカサガイやドブガイ、ため池ではドブガイの鰓葉内に産卵する。産卵哺育貝となる二枚貝の生息が必要条件である。

【県内での生息状況】 1978年の所沢市柳瀬川での生息記録を最後に、県内では絶滅したと思われたが、埼玉県天然記念物基礎調査で1984、1985年に比企郡滑川町福田の3つのため池で本種の生息が確認された。ため池では密漁やオオクチバスの生息が確認されたことから、絶滅のおそれがあるとして全個体を県が緊急保護した。ため池での産卵哺育貝はドブガイであった。ため池は谷津に造られており、どのような経路で本種が入り込んだかは明らかではない。その後は採集記録がなく、野生個体は絶滅した（金澤，1990,1991）。

【特記事項】 比企郡滑川産の個体群は、人工授精で継代飼育されている。二枚貝の繁殖技術が確立しつつあり（Fujibayashi et al.,2016；田中ほか，2012）、野生繁殖に向けた取組につながる事が期待できる。所沢市柳瀬川産の個体群は、1980年代に地元保存会が所有していた個体数が12尾と少なかったため、文化庁、故中村守純氏、地元市教委と協議した結果、在来個体群を維持するには早急に人工授精を行うことであった（金澤，1986）。

【目名・科名】	コイ目コイ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	NT
【和名】	ヤリタナゴ				
【学名】	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck and Schlegel)	指定状況	-		
【形態】	口に1対の長いひげがあり、背鰭軟条間の鰭膜の途中に黒斑がある。体側には有色の縦帯がない。体の側線は完全で、尾柄部まで達する。側線鱗数は36～39、体色は生時銀白色。産卵期のオスは顕著な婚姻色を現す。全長6～8cm。				
【国内分布】	本州、四国、九州（南九州を除く）				
【主な生息環境】	5月～7月頃に用水や河川でマツカサガイやドブガイなどの鰓葉内に産卵する。産卵哺育貝となる二枚貝の生息が必要条件である。湧水の細流など水質汚濁が進行していない水域が適地とされている。				
【県内での生息状況】	荒川水系の荒川、越辺川支流、利根川水系の江戸川など限られた水域でのみ生息しているが、生息域の環境変化や産卵哺育貝の分布状況から生息数は減少している。				
【特記事項】	一部の愛好者によって本種の産地不明な繁殖種と産地不明な産卵哺育貝が放流されている水域がみられ、滋賀県琵琶湖産と思われる銀鱗個体も何度か採集されている。本県の在来個体群への影響が懸念される（金澤，2014a）。				

【目名・科名】	コイ目ドジョウ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	EN
【和名】	ホトケドジョウ				
【学名】	<i>Lefua echigonia</i> Jordan and Richardson	指定状況	-		
【形態】	口ひげは4対。尾鰭基底中央に暗色斑がない。オスの体側に黒色縦帯がない。眼は頭の側面近くにある。背鰭と尾鰭に暗色斑点が散在する。全長5～7cm。				
【国内分布】	本州（青森県を除く東北地方～三重県・京都府・兵庫県）				
【主な生息環境】	河川の中流域に主に生息する。小河川の源流付近や湧水が残り、サワガニの生息や、水生植物が自生するような水域が適している。				
【県内での生息状況】	荒川水系の荒川、柳瀬川、入間川、都幾川、槻川、吉田川、赤平川、新河岸川流域の支川、利根川水系の小山川、女堀川などに生息する。砂防工事でコンクリート護岸された生息地では、砂防堰堤直下に僅かに流下して残存した礫とオランダガラシ群落からなる環境に数尾単位で生存していた事例もあった。このような河川では落差1mほどの砂防堰堤ですら移動経路を完全に閉ざすことになり、本種資源の供給も十分ではないため安定的な生息地にはなり得ない。				
【特記事項】	本種は種内の遺伝的な多様性が高いことから、保護の名目で採集し、繁殖させた個体を安易に他水系に移殖する行為は好ましくない。県内で最も標高が低い生息地として、標高10m以下の湧泉地帯で生息が確認されているが、近隣地域の開発に伴い、湧泉の枯渇するか危惧される。				

【目名・科名】	トゲウオ目トゲウオ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2015)	CR
【和名】	ムサシトミヨ				
【学名】	<i>Pungitius</i> sp. 4	指定状況	県内希少野生動物種		
【形態】	背鰭に8～9本、腹鰭に1対、臀鰭に1本の鋸歯条の棘を持つ。体表には鱗がなく尾柄部に4～7枚の不完全型の鱗板がある。体高は他のトゲウオよりも高い。体色は暗緑色で、体側に薄黒い斑紋が散在している。親魚の全長は4～6cm。成熟したオスは、腹部を中心に暗黒色が出現する個体や全体的に暗黒色化する個体など多様である（金澤，2011a）。				
【国内分布】	本州（埼玉県の元荒川支流及び元荒川の一部）				
【主な生息環境】	地下水の水温12～18℃で維持され、24時間地下水が一定の水位で通水していること。太陽光があたり、水生植物のミクリなどが繁茂し、巣作りできる環境が必要である（金澤，2011a）。				
【県内での生息状況】	熊谷市の元荒川に生息が限られている。5年毎の生息数調査では、2006年が15,000尾（金澤，2006）、2011年が22,000尾（金澤，2011b）、2016年は2,000尾（みどり自然課，2017）と推定されている。2014年にコイ科魚類が大量に遡上（金澤，2017）するなど、生息域の環境に変化がみられ、野生絶滅が危惧される状況にある。				
【特記事項】	湧水が枯渇したため、現在は、日量約5千トンの地下水を汲み上げて生息地に放流することにより生息条件を維持している。生息地の400m区間は「元荒川ムサシトミヨ生息地」として埼玉県天然記念物に地域指定されている。また『埼玉県の魚』、『熊谷市の魚』に指定されおり、『熊谷市ムサシトミヨをまもる会』の保護活動が日本ユネスコ協会第5回プロジェクト未来遺産に登録された。県、市、地元保全団体などからなる保全推進協議会による保全活動が行われている。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

〔和名〕 **スナヤツメ北方種**

〔学名〕 *Lethenteron* sp. N.

埼玉県(2018) CR 環境省(2015) VU

指定状況 -

【形態】 ウナギ形で尾鰭後端は黒くない。全長 16.5cm 以下。アンモシーテス幼生は眼が未発達、吸盤状の口が裂溝状で、鰓が7つある。全長 10cm 以上で変態し、その後開眼し、吸盤が形成され、眼と鰓を含めて八眼にみえる。変態前の成体個体は全長 10～16.5cm。成熟個体（全長 13.5cm）は第一背鰭と第二背鰭が融合する（金澤, 2016）。形態的な特徴からスナヤツメ北方種と南方種の両種を個体レベルで識別することは困難であるとされているが、北方種は虹彩に黒色素が沈着して黒ずんでいるとされる（愛知, 2015）。

【国内分布】 北海道、本州（琵琶湖流入河川、三重県海蔵川以北）

【主な生息環境】 アンモシーテス幼生は、流れの少ない淵や深い場所に移動し、砂礫中の有機物や珪藻類を食べて成長する。変態後は消化管が退化し、餌を取らずに成熟し、産卵後に死亡する。アンモシーテス幼生から成体への変態は数年かかる。湧泉や伏流水が確保された水域で礫底質が必要である（金澤, 2016）。岐阜県では平野部の湧水河川に北方種が生息する（向井ほか, 2011）。

【県内での生息状況】 高麗川、柳瀬川、入間川、利根川、都幾川で生息が確認された。大河川の伏流水などの湧水地に分布している。利根川では広範囲に連続した分布が確認されているが、他の河川では採集個体数が少なく、その生息状況は明らかではない（金澤, 2016）。

【特記事項】 非寄生性で淡水にのみ分布する河川在留型。今まで1種とされたが両種の分布域から北方種と南方種の存在が提唱された（中坊, 2013）。形態的特徴が類似する隠蔽種群である。ほとんど人目に触れることはなく、生息地においてもその存在すら知られていない場合が多いことから、河川改修などにより気付かれないまま生息地が消滅する恐れがある（金澤, 2016）。

〔目名・科名〕 ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

〔和名〕 **スナヤツメ南方種**

〔学名〕 *Lethenteron* sp. S.

埼玉県(2018) CR 環境省(2015) VU

指定状況 -

【形態】 南方種は虹彩のグアニンが目立つ傾向にあるとされる（愛知県, 2015）。その他の形態はスナヤツメ北方種参照

【国内分布】 本州（秋田県檜木内川以南）、四国、九州北部

【主な生息環境】 岐阜県では河川上・中流域に南方種が分布する（向井ほか, 2011）。その他の生息環境はスナヤツメ北方種参照。

【県内での生息状況】 スナヤツメ北方種参照

【特記事項】 スナヤツメ北方種参照

〔目名・科名〕 コイ目コイ科

〔和名〕 **キンブナ**

〔学名〕 *Carassius buergeri* subsp. 2

埼玉県(2018) VU 環境省(2015) VU

指定状況 -

【形態】 フナ類の中では小型で体高が低い。背鰭の前の体色は黄褐色または赤褐色。背鰭分枝軟条数は 11～14 でギンブナよりも少ない。全長 15cm。

【国内分布】 本州（東北地方の太平洋側、関東地方）

【主な生息環境】 河川や農業用水路、池沼に生息する。雑食性で、春から初夏に水草に産卵する。

【県内での生息状況】 荒川水系、利根川水系の中流から下流の河川、農業用水路、池沼などに生息する。ギンブナに混ざって希に採集されるに過ぎないことから、フナ類の優占種として生息する水域はなく、本来、生息数が他のフナ類に比べて極めて少ない種であると考えられる。比較的汚濁が進行している水域でも生息が確認される（金澤, 2014a）。

【特記事項】 フナ類は河川漁協の漁業権魚種として増殖が義務付けられているが、放流された魚種は養殖されたゲンゴロウブナがほとんどである。本種の養殖は皆無だが、水産試験場が養殖したものが 1996 年に試験的に放流されたことがある。

【目名・科名】	サケ目サケ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	DD
【和名】	ニッコウイワナ	指定状況			
【学名】	<i>Salvelinus leucomaenis pluvius</i> (Hilgendorf)	-			
【形態】	体側に有色斑点があり、多くの白点が散在する。頭部背面の白点は吻端にまで及ばない。秩父イワナと称される個体群は生鮮時の有色斑点が朱、赤色がある。全長10～35cm。陸封型である。				
【国内分布】	本州（山梨県富士川・鳥取県日野川以北）				
【主な生息環境】	河川上流域の水温が低い溪流に生息し、落下昆虫や流下昆虫、水生昆虫、甲殻類などを捕食する。産卵は10月～11月に流れのある礫底に産卵床を掘って産卵する。				
【県内での生息状況】	秩父市の入川、滝川、大洞川、大血川、中津川、浦山川や、横瀬川、入間川などに分布する。				
【特記事項】	奥秩父の荒川源流滝川では、2007年に在来個体群の斑紋と体色が異なる個体が数尾採集されている。採集個体は全て白斑で、秩父イワナ独特の朱色斑と異なる。形態的に秩父以外の産地のイワナもしくはエゾイワナと認識され、一部の支流に源頭放流されたエゾイワナが繁殖していることも判明している（金澤, 2014a）。この地域では、2015、2016年の調査で得られた個体も形態的に全て在来種とエゾイワナとの交雑個体と考えられる。2016年には滝川と入川が合流する下流域で同様の個体が確認されており、秩父湖を介して他の流入河川への遡上が危惧される。これら交雑個体やエゾイワナの存在は、遺伝的攪乱による在来個体群の固有性喪失をもたらすおそれがある。本種に限らず、県産魚類のいくつかの種群については、他県産種苗の放流等により、在来個体群の生息水域がかなり狭められている。				

【目名・科名】	サケ目サケ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2015)	NT
【和名】	ヤマメ	指定状況			
【学名】	<i>Oncorhynchus masou masou</i> (Brevoort)	-			
【形態】	パーマークは側線を超え、頭部背面に小黑点はないか、あってもごく僅かで、尾鰭に黒点はないが上下の縁辺のみ。体側に朱点がない。陸封型10～30cm。				
【国内分布】	北海道、本州（太平洋側では静岡県以北、日本海では山口県以北）、九州（大分県を除く）				
【主な生息環境】	河川上流域の溪流に生息し、落下昆虫や流下昆虫、水生昆虫、甲殻類などを捕食する。産卵は10月～11月に流れのある礫底に産卵床を掘って産卵する。				
【県内での生息状況】	荒川水系の荒川、滝川、入川、大洞川、中津川、赤平川、浦山川、横瀬川、入間川、高麗川、越辺川、都幾川、槻川、および利根川水系の小山川などに分布する。				
【特記事項】	他県産養殖種苗の放流により、秩父系のヤマメの在来個体群は極端に減少しており、在来個体群の遺伝資源の確保が急務である。県内産ヤマメが陸封されてから半世紀以上が経過しており、銀毛個体の出現率は低い。荒川や荒川水系のダム湖で釣獲されている河川湖の降海型の大型個体は、他県産のサクラムス種苗が放流された移入種である。				

【目名・科名】	サケ目キュウリウオ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2015)	-
【和名】	ワカサギ	指定状況			
【学名】	<i>Hypomesus nipponensis</i> McAllister	-			
【形態】	臀鰭の外縁は直線的かわずかに湾入する。上顎の後端は眼の瞳孔の中心に達しない。脂鰭は小さく、その基底は眼径より短い。全長7～14cm。				
【国内分布】	北海道、本州（東京都・島根県以北）				
【主な生息環境】	産卵及び稚魚の育成場所として、産卵床となる砂礫帯や水生植物群落が必要条件である。ふ化、成長後、河川を下り河口・沿岸域での生活に入るが、産卵期になると河川を遡上する。				
【県内での生息状況】	本県の水域では、荒川、江戸川、中川等で3月～4月頃に産卵のために遡上している。ふ化後は、数ヶ月間下流域に留まり、6月～8月頃には全長3～4cm程度に成長する。その後河川を下り、河口・沿岸域での生活に入り、春先に産卵のために河川を遡上する（金澤, 2014a）。荒川では汽水域の最上流で再生産している（金澤, 2014a）。また、海域と通じて途中に防潮堰等の河川横断物の遡上障害がない河川で遡上し、再生産している。				
【特記事項】	日本各地の湖池沼等に移植放流されているワカサギではなく、本県のワカサギは東京湾から産卵期に河川を遡上する個体群である。人目に触れることはなく、その生息はほとんど知られていない。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕	ウナギ目ウナギ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	EN
〔和名〕	ニホンウナギ	指定状況			
〔学名〕	<i>Anguilla japonica</i> Temminck and Schlegel				
【形態】	体の背方は暗色、腹方は白色もしくは黄金色で、体にまだら状の斑紋はない。背鰭起部は胸鰭後端と肛門の間点か、それより後方にある。大きい個体は全長110cm、体重2.1kgにまで成長する（金澤ほか、1997a）。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州、南西諸島				
【主な生息環境】	海域で一生を過ごす個体と、海域から河川に遡上し成長した後、産卵のため再び海域へ下る個体が知られている（環境省、2013）。海と川を行き来し、水田や池にまで遡上できるような河川環境が必要である。浮き石、植生、あるいは流れが緩やかな場所の石と石の隙間などで、隠れ場所となる生息空間が必要である。また、えさとなるアユ、エビ類や小魚などが豊富な水域に生息する。				
【県内での生息状況】	荒川水系や利根川水系に分布する。荒川では寄居町の玉淀ダム堤体直下から下流の川口市まで分布。荒川では体色が透明なシラスウナギの遡上が確認されている（金澤ほか、1997a）。				
【特記事項】	環境省RDB（2015）のレッドランクは、それまでのDDからENにランクアップした。産卵場であるマリアナ海溝で捕獲された本種13個体すべてにおいて汽水履歴が確認（うち9個体は淡水履歴があった）されており、河川に遡上する個体が産卵に寄与していることが明らかになっている（環境省、2013）。河川改修工事により本種の隠れ場所やえさ場が減少し、設置された堰が遡上阻害物となり生息域が狭められている。				

〔目名・科名〕	ダツ目メダカ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2015)	VU
〔和名〕	ミナミメダカ	指定状況			
〔学名〕	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck and Schlegel)				
【形態】	体側後半の黒色素胞は網目模様を形成しない。体側後方に染み状の斑紋がない。オスの背鰭の欠刻は深い個体が多い。全長約2～3cm。				
【国内分布】	本州（以下の各地） 長野県（千曲川水系）、京都府綾部（由良川水系中・上流）、丹後半島竹野川水系、兵庫県竹野（谷田川水系）、鳥取県岩見（小田川水系）以西の日本海側（兵庫県浜田の岸田川水系を除く）、隠岐諸島島後、見島、盛岡（北上川水系）・大船渡（盛川水系）以南の太平洋側 瀬戸内海の沿岸及び島嶼 四国 九州（本島および以下の各地） 対馬、壱岐、五島列島福江島、天草諸島下島、甕島列島 南西諸島（以下の各地） 種子島、馬毛島、喜界島、奄美大島、加計呂麻島、伊平屋島、沖縄島、渡嘉敷島、久米島				
【主な生息環境】	平野部の河川、池沼、水田、用水路などの水際帯に水生植物群落が必要である。農業用水では、本川からの導水により用水に入り込み、流れが緩やかな水際を遡上する。落水時に逃避もしくは取り残されて鳥類の餌となるほか、水が干上がり死滅する個体も多い。流域の湿地帯の消失や河川のコンクリート護岸化により生息域を失い、減少する傾向にあるが、護岸化後の水際に泥が堆積して植生が繁茂するようになると、そこを二次的生息地として利用する水域も見られている。				
【県内での生息状況】	荒川、利根川水系に分布する。				
【特記事項】	県内各地で、他県から移殖されたものや人為的に繁殖させた個体が放流されており、今まで本種が生息していない水域にまで分布する。在来個体群を分離し、保護できる体制を検討すべきである（金澤、2014a）。 本種が減少する要因として、用排水路のコンクリート三面張り護岸、農業用水の冬期止水、地下水位の低下、河川整備による水際帯の抽水、沈水植物の除草や河床の浚渫、農業用排水路面と水田面の落差等がある。				